

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	大 野 木 俊 文
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">社会科黎明期のカリキュラム論の思想と原理 —創設メンバーの社会科教育観の諸相と形成要因—</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	木 村	博 一
審査委員	教 授	棚 橋	健 治
審査委員	教 授	権 藤	敦 子
審査委員	教 授	草 原	和 博
審査委員	准教授	永 田	忠 道
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、日本の社会科黎明期のカリキュラム論の思想と原理を解明し、特に創設メンバーを中心として社会科の原型が創り出されてきた過程と諸相を再評価することを目的としている。ここでいう「黎明期」とは、新教科として社会科が始まった時期のことであり、敗戦直後の1945年から1958年の社会科学学習指導要領に至るまでの間を指している。</p> <p>序章では、次のように本論文の意義と特色をまとめている。</p> <p>第一に、先行研究が創設メンバーの論稿を文部省や学習指導要領の範疇でとらえていたのに対し、本研究は彼らが当時の社会科教育界における理論的指導者でもあったことを踏まえ、彼らが提唱した社会科教育論自体の特質と限界を解明しようと試みていること。</p> <p>第二に、先行研究が社会科教育の思想の概要、すなわち創設メンバーの社会科教育観を全体的・表面的に把握するレベルに止まっていたのに対し、本研究は彼らの社会科教育観とはどのようなもので、形成された要因は何だったのかを究明しようと試みていること。</p> <p>より具体的に考察を進めていくために、本研究では次のような方法を用いている。</p> <p>第一に、中心人物として上田薫を設定し、彼と他の創設メンバーの社会科教育論を比較しながら検討していくことで、社会科黎明期のカリキュラム論の諸相を解明していく。</p> <p>第二に、パラダイム・シフトの要因とされてきた教育的要因と政治的要因だけでなく、心理的要因から分析することで、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と限界を解明していく。ここでいう「心理的要因」とは、主に現場の教師の動向を指している。</p> <p>本論の構成は、次のとおりである。</p> <p>第一章では、社会科黎明期のカリキュラム論の類型化を試みている。カリキュラム論の歴史的背景と先行研究の検討をふまえて、本研究の類型化の指標を設定し、指標とした原理から、①「目標原理型」カリキュラム論、②「内容原理型」カリキュラム論、③「方法原理型」カリキュラム論という3類型を導いている。</p> <p>第二章では、類型①「目標原理型」カリキュラム論に関する考察がなされている。上田薫と重松鷹泰の人間形成と道德教育を焦点とした社会科教育論を比較して検討することで、双方の思想的特質を解明している。二人の教育論が展開されるにつれて社会科を中心</p>			

とした道徳教育が崩壊していった心理的要因を分析することで、「目標原理型」カリキュラム論としての上田と重松の社会科教育論の果たした役割と限界を明らかにしている。

第三章では、類型②「内容原理型」カリキュラム論に関する考察がなされている。上田薫と勝田守一の総合社会科と分化社会科を焦点とした社会科教育論を比較して検討することで、双方の思想的特質を解明している。二人の教育論が展開されるにつれて総合社会科が形骸化していった心理的要因を分析することで、「内容原理型」カリキュラム論としての上田と勝田の社会科教育論の果たした役割と限界を明らかにしている。

第四章では、類型③「方法原理型」カリキュラム論に関する考察がなされている。上田薫と馬場四郎の問題解決学習とコア・カリキュラムを焦点とした社会科教育論を比較して検討することで、双方の思想的特質を解明している。二人の教育論が展開されるにつれて社会科の教育理論が転換していった心理的要因を分析することで、「方法原理型」カリキュラム論としての上田と馬場の社会科教育論の果たした役割と限界を明らかにしている。

終章では、第二～四章の分析結果をもとに、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質を整理している。上田・重松・勝田・馬場の社会科教育論の展開によってパラダイム・シフトに生じた心理的要因を分析することで、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と限界を明らかにしている。その上で、本研究は次のように総括されている。

日本の社会科創設メンバーは「民主主義社会の建設にふさわしい社会人を育て上げようとする」ことを社会科教育の目的として、社会科の理念を実現するために、それぞれにカリキュラム論を展開した。しかし、同じ創設メンバーといえども、信念と信念がぶつかり合い、思想的立場が入り乱れた不安定で不統一な集まりであった。その意味で、社会科黎明期のカリキュラム論は立脚点の乱立した一貫性に欠けるものであったと評価することができる。他方、小・中・高等学校の一貫したカリキュラムと目標論・内容論・方法論の一貫した教科論を展開したことについては、肯定的に評価することができる。

日本における社会科の原型は、新教育がめざす人間像と新教科が果たす役割という命題をめぐり、創設メンバーが鎬を削り合いながら創り上げられた。思想の葛藤と原理の矛盾という論争的な性格をもつがゆえ、創設メンバーの社会科教育観と連関して現場の教師の動向を左右したところに、黎明期の社会科カリキュラム論の思想的特質と限界があった。

本論文は、次の4点で高く評価できる。

1. 日本社会科の創設メンバーの思想的立場に関する論稿を実証的・総合的に追究することで、彼らの社会科教育観の諸相と形成要因を明らかにした。
2. 創設メンバーの社会科教育観に基づき、提唱された社会科教育論の特質と学問的アプローチを考察し、社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と限界を解明した。
3. 社会科黎明期のカリキュラム論の思想的特質と関連づけてパラダイム・シフトの心理的要因を考察することで、日本の社会科が創出された過程を再評価することに成功した。
4. 社会科教育史研究の新たな領域と研究方法論として、社会科教育の思想的系譜を史実として対象化する研究としての「社会科教育思想史研究」を開拓した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 4 年 2 月 7 日